

令和3年度自己評価表

鳥取県立岩美高等学校

【中長期目標(学校ビジョン)】

【今年度の重点目標】

岩美高生としての誇りと自覚を持ち、何事にも「誠実に対応でき、他者と「協働」して物事に取り組み、夢に向かって「果敢」に挑戦する人間を育成する。

- 1「学力」＝「学ぶ力」の向上と進路実現
- 2「人間性」の育成
- 3地域と連携した学校づくりと魅力化

	具体項目	令和3年度当初			中間評価(9月)		
		現状及び課題	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
1 「学力」＝「学ぶ力」の向上と進路実現	基礎学力の向上	【現状】 ・生徒の基礎学力の向上感は約85%を超えており、取組の方向性に期待感が増してきている。 ・基礎力診断テストのD3ゾーンの生徒数が、1年生の国語以外は20%減を達成し、基礎学力の定着とのための学習への取組状況が一定程度改善されてきている。 【課題】 ・生徒が向上感を覚えている基礎学力が、高校学習水準に到達していないケースも散見される。	・生徒の学力の向上感が85%以上で、職員の向上感との差が25ポイント以内になっている。 ・1・2年生の基礎力診断テストにおいてD3ゾーンの生徒数が年度始めより20%以上減少している。	・各教科でのリスタート学習の取組を全体で共有して実施する。 ・基礎力診断テストにおいて事前事後の取組を行う。 ・授業アンケートの結果を踏まえて生徒の視点から学習指導を行う等の授業改善に取り組むとともに、学び方の指導も含めて生徒の主体的な学びを啓発する。	・学年と各教科が連携を図りながらリスタート学習の取組を行っている。本年度5月基礎力診断テスト結果によると、生徒の基礎学力の向上感は約87%と高い一方、職員の向上感との差は約21ポイントとなっており、実情としての定着状況は取組途上の段階にある。 ・基礎力診断テストの結果分析は進行中となっている。	C	・基礎力診断テスト結果の状況をデータ化するとともに、学校評価アンケート(7月)結果も踏まえて、各教科及び学年で(1)授業改善の具体的なポイントを明確にし共有する(2)より効果的な次年度リスタート学習の方策について具体的に検討する。 ・基礎力診断テストの分析検討会を教員研修として実施し、生徒個別面談での具体的な目標設定や課題解決につなげるとともに教科指導においても有効活用する。
	キャリア教育の推進	【現状】 ・ジオパーク学習(1年次)やイワツツミッション(2年次)等の地域課題解決型学習及び各類型の特徴を生かしたキャリア形成支援企画等とおして、課題解決能力や自己理解支援を進めている。 【課題】 ・将来、社会人としてどのように活躍できるかについてのイメージが希薄である。 ・自分の興味・関心、適性や可能性等を見出せず、自らのキャリア形成を主体的に進められない生徒が多い。	・地域との活動をとおして様々な世代の人々と触れ合い、より広い世界に目を向けられるようになっていく。 ・生徒の90%以上が本校の教育方針を認識している。 ・進路実現に向けて行動を起こしている生徒が80%以上になっている。	・担任等による個人面談及び進路指導部面談等を充実させる。 →生徒が自分では認識できていないかもしれない可能性や特長に気づかせる。 ・キャリア・パスポートを活用する。 →講演会等での気づき等を言語化・可視化させることをとおして自分の興味・関心、適性等について考察させる。 →生徒の行動と実社会との関わりについて考察させ、より広い進路展望を拓かせる。	・学校評価アンケート(7月)結果によると、「本校教育方針を認識している」と回答した生徒は87.3%、「進路実現に向けて行動を起こしている」と回答した生徒は73.6%となっており、いずれも目標数値を若干下回っている状況にある。	C	・担任面談の情報を進路指導部と共有し、進路専任面談を実施することで、生徒の自己認識の深化を支援するとともに、生徒がキャリア形成により積極的に取り組めるよう個別に具体的なアドバイスをする。 ・進路指導部が主となってキャリア・パスポートの活用計画を立て、定期的に自分の興味・関心、適性等について具体的に考察する時間を確保する。
	進路実現	【現状】 ・令和2年3月卒業生の1年以内の離職率は15.6%となっている。 →低い水準で推移 ・昨年度は就職試験解禁が1か月遅れたが、12月上旬に就職希望者の内定率100%を達成した。 ・令和3年度公立鳥取環境大学入試に3名が出願し、1名が合格した。 【課題】 ・生徒の主体的な進路情報収集及び開拓の意識が低い状況がある。 ・現状に満足し、より高い目標にチャレンジしない生徒がみられる。	・進路目標達成率100%となっている。 ・第1志望での合格・内定率が90%以上となっている。 ・より高い目標を掲げてそれを実現するために具体的な行動する生徒が増えている。 ・就職1年以内の離職率が県平均以下となっている。(参考:平成30年度3月卒業者分鳥取県平均離職率16.2%)	・進路志望調査「後」の個別指導を充実させる。 →生徒の主体的な最新進路情報の収集を啓発 →高い目標を掲げ、進路実現に果敢にチャレンジさせる指導の強化 ・各種ガイダンスや事業所説明会等を充実させる。 →狙いと目的の明確化 →社会が求める力を把握し、その力を習得するための方策を具体的に指導	・新型コロナウイルス感染症感染予防対策を徹底する観点から、進学・就職ガイダンスや事業所説明会等について状況に応じた代替事業を実施できている。 ・卒業生の1年以内離職率については、令和2年度3月卒業生が18.8%、令和3年度3月卒業生が6.3%(8月末現在)となっている。 ・キャリアアドバイザーの精力的な取組により、新規就職先が開拓されたり、コロナ禍に対応した形態での事業所説明会等を複数回実施できたりしている。	C	・進路実現に関連する各行事や各事業の狙いや意義等について教員間でしっかりとした共通認識を持って臨み、実施後に生徒の振り返りを徹底することで、生徒が自らの在り方や今後について主体的に考えられる時間をより多く設ける。 ・生徒との6～7分程度の短時間面談を励行し、高い目標や意欲を啓発する。
2 「人間性」の育成	基本的生活習慣とマナーの確立	【成果】 ・頭髪服装検査で再検査となる生徒数は10～20%。ほとんどが軽微な違反であり、各学年で細かく指導をしている結果である。 【課題】 ・令和2年度学校評価アンケート	・頭髪服装指導において再検査を受けなければならない生徒が減少している。 ・挨拶、返事、頭髪服装等の基本的生活態度が良好な状態が維持され、生徒の肯定的自己評価が90%以上、職員の肯定的評価が80%以	・日常的な指導と定期的な全体指導を充実させる。 ・指導ノートを有効活用する。 ・生徒・保護者に丁寧に説明するとともに適時な連携による指導を徹底する。 ・「報告・連絡・相談」を徹底し、各	・頭髪服装検査で再検査となる生徒数は例年と変わらない。ほとんどが軽微な違反であり、各学年できめ細やかな指導が継続できている。 ・学校評価アンケート(7月)の生徒の回答をみると、校則やマナーの厳守、挨拶や返事に関する意識は高い。	B	

		(12 月)の生徒の回答をみると、校則やマナーの厳守、挨拶や返事の意識は高いが、朝の様子を見ると挨拶ができない生徒が増えている。 ・令和2年度歯科検診において虫歯があると診断された52名のうち、令和3年1月時点までに通院し治療を受けた生徒が21名(40.3%)となっている。	上となっている。 ・歯科検診において虫歯があると診断された生徒のうち、60%以上の生徒が通院し、治療を受けている。 ・TEAS の取組を通して、ゴミの分別・減量化やエアコン等使用電力量の削減に意識して取り組むことができる。	学年、授業担当者と緊密に連携する。 ・歯科検診後、当該生徒及び保護者に速やかな受診・治療を促すとともに、保健だより等とおして啓発する。 ・TEAS 研修会を実施するとともに時宜を得て指導する。	・今年度は歯科検診時にその場で個別指導を行い、受診・治療を促した。また、保健だよりでも要受診者への啓発を行っている。		・受診のお知らせを複数回配布し、受診の徹底を図る。 ・当該生徒を対象に保健指導を個別に行い、啓発を強化する。
	部活動の振興	【成果】 ・部活動全員加入を原則としており、令和3年度当初時点で未加入者は0名。 【課題】 ・部員確保が困難な部活動がある。	・全生徒が部活動に加入している状態が継続している。 ・部活動に対する満足度が高く、忍耐力、礼儀、自己肯定感が向上している。	・部活動指導計画に基づいた適切な運営をとoshi、技術向上のみならず人間的な成長を支援する。 ・本校の実態及び将来像に即した部活動を精選する。	・9月末段階で部活動未加入者は0名である。 ・部活動に真面目に取り組んでいる生徒の割合も増えており、部活動を通して礼儀、マナー、忍耐力等が身に付いていると認識している生徒も増えている。	B	
	多様な生徒理解及び自己有用感の伸長	【成果】 ・SNSを巡る問題は常に少なからず発生していると認識はしているが、大きなトラブルに発展した事案は発生しなかった。 【課題】 多様な生徒理解のための取組を継続する必要がある。 (参考:令和2年度生活満足度調査結果) ・学校が安心安全な場所と感じている生徒 54% ・学校の日常生活で困っていることがある生徒 11.8% ・学習面で困っていることがある生徒 19.8%	・周囲に配慮した言動ができるようになっている。 ・学校が、生徒にとって安心で安全な場所になっている。 ・生徒一人ひとりが自己実現を目指し、あらゆる教育活動の中で生き生きと活動している。 ・全教職員が、生徒の発達段階に応じて援助・支援している。 → 岩美高版UDを意識して効果的な指導・支援に取り組む教員の割合が80%以上となっている。	・集団指導 ・情報モラル講演会等を早期に実施する。 ・全校集会・学年集会・HR等、あらゆる機会を通じて、ケータイ・スマートフォンの扱い方や、SNSの危険性について啓発活動を行っている。 ・個に応じたサポート ・生徒観察 ・個人面談や個別学習指導 ・保護者や関係機関との連携等 ・教職員向け情報発信 ・生徒の自己理解、他者理解を深め、自己有用感を高めるためのヒント等	・令和3年度生活満足度調査(5月)の結果では、「学校が安心安全な場所である」と回答した生徒は64.4%であった。 ・また、生徒の困り感については、「学校の日常生活で困っていることがある」と回答した生徒が12.9%,「学習面で困っていることがある」と回答した生徒が24.7%であった。 ・岩美高版UDを意識した授業に取り組む教員の割合は72.7%と減少している。 ・生徒理解のための取組としてhyperQU研修会を行った。 ・hyperQU検査及び生活満足度アンケートの結果で、侵害観や学校生活に悩みのある生徒については、学年・クラスと共有し、担任や保健人権部による面談等を即応的に行った。	C	・生徒の困り感を解消するため、引き続き丁寧に、個に応じたサポートを継続する。 ・生徒の自己理解及び他者理解を高めるための生徒対象講演会並びに教職員対象研修会を11月に実施予定である。 ・どの生徒もが学習内容を理解できる授業及び岩美高版UDを意識した授業について、生徒の実態を踏まえた指導上の工夫を継続的に行う。 ・多様な悩みを抱える生徒が多くいる中、外部専門機関との連携をより深め、適切に対応する。
3 地域と連携した学校づくりと魅力化	類型制の発展・充実	【成果】 ・家庭への情報発信については8割程度が十分できているという感触である。 【課題】 ・令和3年度新入学生が定員の5割未満となっている。 ・報道機関への資料提供に努め、生徒の活動を広く発信しているものの本校の教育活動の魅力が効果的に伝わっていない。	・新入生を入学者定員の3分の2以上確保できている。 ・各類型の学習内容の魅力が発信できている。 ・類型の特性を生かし、積極的に地域との交流が図れている。 ・高校が地域の方に誇りを持っている。 ・地域コミュニティの拠点となっている。	・各類型の特性をより活かした教育活動を工夫するとともに、内外への広報を強化する。 ・各類型の学習内容の検証・改善を恒常的に行う。 ・生徒が地域貢献を自分事としてとらえる地域貢献活動の機会を増やす。	・新聞、県教育委員会ツイッター等での発信を強化するとともに、学校紹介DVDやポスターを作成し、管理職の中学校訪問等とおしてより積極的な広報活動を行っている。情報発信力の指標は学校内外とも80%以上を示している。 ・新型コロナウイルス感染症感染予防対策のため、地域連携事業が実施できないケースが生じている。	B	・各類型の教育内容の再構築を推進する ・本校が育成を目指す生徒像について、教職員間でざくばらんな意見交換を行い、新学習指導要領の全面導入に対応するだけでなく、ワーキンググループを立ち上げ、今後の本校の在り方や類型制のより効果的な運用について具体的に検討する。
	イワッツミッションの発展・充実	【成果】 ・地域連携・貢献が生徒の育成に効果を上げていると感じている職員の割合は7割程度である。 ・地域と連携した活動に対し、概ね理解が得られ、協力体制ができている。 ・第2学年のイワッツミッションでは、類型制の特徴を生かした取組を行っている。 【課題】 ・「地域に貢献したい」と思う生徒の割合が低下してきている。 ・企画・調整・運営等を行う担当教員の負担が大きくなっている。	地域連携、地域貢献の取組を通して、自らが居住する地域を支える存在であることを理解している生徒を育成する。 →地域と連携した授業の実施件数が延べ50講座以上となっている。 →「地域の行事や活動に参加した延べ人数」(授業として参加するものを除く)が学校全体の生徒数以上となっている。 →地域と連携し、地域に貢献する活動が生徒の人間力の育成に効果を上げていると思う職員の割合が75%以上となっている。 →「地域に貢献したい」と思う生徒の割合が全校の80%以上となっている。	・地域課題解決型学習(イワッツミッション)を地域連携の核と位置付けて取組を進める。 → スキーム及びフレームの再構築 → 活動内容を充実及びそのための授業時間の確保 → 岩美町役場等と効果的な連携を構築 ・生徒の探究的活動に係る基本的なスキルの向上を図る。	・イワッツ・ミッションは、「まちづくり」のテーマを基軸とし、類型の特徴を生かした6つのグループを編成して、地域課題の解決について取り組んでいるところである。 ・学校と地域とで良好な関係性を構築し、継続した外部連携を実現するために、地域の素材や教育環境の情報収集を引き続き行っている。 ・学校評価アンケート(7月)結果によると「地域と連携し、地域に貢献する活動の充実感」は約84%,「生徒の人間力の育成に効果を上げている」と思う職員の割合は約78%であった。 ・「地域に貢献したい」と思う生徒の割合は約75%と昨年度比で減少しており、新型コロナウイルス感染症感染拡大に伴い校外での活動が制限されたことが生徒の意識形成に影響していることも想定される。	B	・イワッツ・ミッションの内容や教育的効果をさらに拡充させるために、学年団や外部との連携を密にしながら情報の共有、活動の工夫を行う。 ・イワッツ・ミッションをとoshした生徒の自己変容の程度を確認するために、事前事後のアンケートを実施し、定性変化を追跡する。 ・イワッツ・ミッションの成果と課題を基に、本校らしい地域課題解決型学習の在り方に関するワーキンググループを立ち上げ、R4以降のプログラムに関するスキームとフレームを再構築する。

評価基準 A：十分達成 [100%]

B：概ね達成 [80%程度]

C：変化の兆し [60%程度]

D：まだ不十分 [40%程度]

E：目標・方策の見直し [30%以下]